

毎月一回15日発行昭和50年12月15日発行・第71号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

# リベルテール

12月号



Libertaire VoL, VII, No. 1

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可  
昭和50年12月15日発行 第71号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年12月15日発行 VoL, VII No.1
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190  
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月一回15日発行 振替東京13,3830番 三浦精一

今月のことば

|            |                           |
|------------|---------------------------|
| スト権スト当事者能力 | スト中止の決議ができて中止させ得ない能力      |
| 政府         | 決断を迫られて独裁者でないといと逃げる能力     |
| 三木首相       | 法的秩序で威圧する能力               |
| 自民党        | 10日間ぶち抜きストを8日で止めた管理能力     |
| 公労協        | 中古電車と旧態教設でボイナスを稼いだ能力      |
| 各私鉄会社      | ブツブツ言つて耐える能力              |
| 国民         | 学校に主任制を導入                 |
| 星上屋        | ママ、こうしよう先生とまよう先生と         |
| を重ねる       | しゅにん先生のうち、だれが教える先生なの？     |
|            | バカネ、しゅにん先生は救える先生を指導する先生なの |
| 自己批判       | われわれが身を三貧する。              |
|            | 人を傷つけていないか                |
|            | フブリス（総漫）でないか              |
|            | 誌面を独占していないか               |
| ユートピアは     | 金                         |
| 沈黙は        | 無                         |

目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 巻頭言                    | 1  |
| 綿さんの計                  | 2  |
| 綿引邦農夫君の永眠              | 3  |
| — 思い出すことども —           | 3  |
| 尋常の死と非常の死と             | 7  |
| — はしもとよしはる —           | 7  |
| エスベラントとアナキストたち         | 9  |
| — 江藤敏一 —               | 9  |
| 想い出の人びと(1)             |    |
| — 平岩様について、近藤憲二君のこと —   |    |
| 安谷寛一                   | 13 |
| 野火                     | 14 |
| 海外だより                  | 16 |
| 海外資料に処る—イラスト・マンガ・カット集— | 17 |

お知らせ

リベルテールサロンは12月23日に終り  
一月二〇日（第四火曜日）に再開しま  
す。

第七年目に際して

リベルテールの第七巻第一号をおくる。

アナキスト連盟解散後、皆で麦社をつくって、パンフレットなどを出していた。時とともに思想的に相容れないもののあることを知り、「正しいと思うことについて世に問わねばならない」と考えるようになった。正しいと思うこと、といっても、別に僕が新しい思想を開拓したからではなかった。僕は先輩たちから受継いだものしか持つてはいない。スチルナー、ブルードン、トルストイ、クロボトキン、バクニン、ルクリュ、ガンジー、マラテスタ、幸徳、石川などを生かじりにかじっただけである。しかしその先輩たちから示されたアナキズムを受け継いで、アナキズムこそ人類の永遠の思想だと信じている。先輩たちが画一的なアナキズム思想をもっているのではなく、個性的であり、環境も時代も、考え方にも違いがある。マルクス・レーニン主義者や権力主義者に言わせれば、バラバラなのだ。人間が一人一人違いうようにアナキストもそれぞれ違つて決して画一的でなく、自発的なものだ。それでいて一貫したものをもっている。だから人間的な思想なのだ。その一貫したものの中に共通した権力否定、人間の自由、平等、友愛があつてあらゆる権力思想に対決する反逆の思想である。毛沢東がいかに無政府主義的に見えようとそれは問題ではない。彼が権力を志向した時、彼は権力主義者なのだ。マルクスやレーニンがいかに反権力的言辞を弄しても、現政権を倒して権力を握るためのジエスチュア以外のものではない。

こうした考え方は創刊以来変わつてはいない。そして皆が自由に発言し、自由に討論するために、僕と反対だと思われるものもせた。それを発表することによって互に討論すべきだと思つたのだ。だが、老人も若い者たちもあまり熱意は見られず今におよんだ。

リベルテールの発刊にあつて、池袋で大勢の人たちを集つてもらった。リベルテールの創刊号の第一ページをかざつたのは江川君の文だった。支持をお願いして今も変わらず、物心両面で支えてくれている萩原、布留川両君がある。印刷でははしもと君が犠牲を払つてくれている。

リベルテールは最初から小さな月刊誌だ。今もそうだ。資力なしで何年も続けるためには、結局僕がその不足を埋めて行かねばならないと思つたからだ。線香花火の外観を追わず、生き抜くことによつてその存在を続けたいと思つたからだ。そして第七年目に入つた。相変らず小さい。小さいが型にはまらず無軌道に、詩でも小説でも童話でも論文でものせて、つかみ所のないアナキストの正体を見せたいのだ。つかみ所のないのが人間だからだ。アナキズムこそ人類永遠の思想なのだ。（三浦精一）

## 綿さんの計

ハギシン

同志から綿さんと愛称された綿引邦農夫氏が二月三日、永眠された。昨年五月から足に水腫がおこり、暮に入院、脳軟化症と腎臓病を併発したのである。

「一生、働き通したので最後の一年間が、せめてもの休暇だったと思う。……亡くなった同志の名をウワゴトのように呼び、岩佐、嶋津その他が床のまわりに集っている、と語る。いくら否定しても聞かなかった」と長女の正子さんは語った。

綿さんは、私が練馬労協を組織したとき、応援にかけつけてくれた。大井鎧町の彼の家で、買出しの貴重な諸を食べながら、アナ連の会合をひらいたこともある。文芸工業会館での労働運動協議会でも、よく論じあった。「自由をかちとるためには、いかなる闘いも自由だ」が彼のモットーであった。

だが、アナ連が分裂してからは、私の方に隔意はないのに、彼は打ちとけようとはしなかった。三浦氏と三人で山鹿氏を見舞ったこともある。メーデーやその前後集会、リベルテールの研究会や集会、近憲を偲ぶ会その他の顔を合せたし、川崎の新居を訪ねたこともある。数年

前のメーデーでは私の妻子に、お祭騒ぎを憤慨し戦前の話を熱心に聞かせていた。それでも、以前のように意思がつうじあえなくなっていたことが残念である。

彼は、アナキスト小辞典の回答を拒まれた一人である。然し今はもう怒られることはない。ここに氏の戦歴をかかげ、深い敬意と哀悼の意を表したい。

### 綿引邦農夫氏の戦歴

一八九五年三月二五日、茨城県水戸下国井の農家の長男に生まれる。父の死後、上京して印刷工となる。

一九一八年、米騒動のあとについて一晚拘留される。

一九一九年二月九日、布留川兄弟・和田栄太郎らと発起人となり、新聞印刷工組合「正進会」を結成する。

一九二六年五月二四日、「全国労働組合自由連合会」結成大会で経過報告をおこなう。

敗戦後、読売新聞に勤め、メーデー復活に尽力する。

一九四五年、四六年の読売大争議に尽力、バージされる。四六年五月、「日本アナキスト連盟」結成に加わり全国委員となる。

機関紙印刷所に勤め、アジプロとオルグをつづける。共産党の青年数人をアナキズムのシンパにさせる。

一九五一年六月、アナ連分裂後「日本アナキストクラブ」を岩佐太郎・水沼辰らと結成。不定期機関紙「無

政府主義運動」を刊行し、もちまわりで例会をつづける。

一九七四年まで小印刷所を転々として働く。

一九七五年一二年三日、病死。

## 綿引邦農夫君の永眠

一 思い出すことも一

三 浦 精 一

十二月三日朝七時三〇分に綿引君が亡くなったと知らせてくれたのは、布留川信君だった。告別式は五日の正午からだ。

綿引君との交流は終戦後からで、その活躍した頃の事は知らない。だから決して深いものではない。それも終戦後結成されたアナキスト連盟で会って、何処だったか記憶していないが、石川さん、岩佐さんを交えた十数人が集って革命歌を高唱したときだったと思う。その後僕は進駐軍に住み込んで横浜に行き、それから造船会社に入ってから横浜に居て、アナキスト連盟には顔出しもしていなかった。アナキスト連盟といっても終戦後すぐ出来て平民新聞を発行していたものの後に、さらに結成されて「クロハタ」を出していた連盟がある。この連盟は岩佐老人を中心に来たアナキスト・クラブと分れて結成されたもので、石川さんの傘下にあった。こ

の分裂の頃、僕は石川さんの近くの上北沢にいたが、何時、どうして、なぜ分裂したのか全然知らなかった。僕の耳に入ってくるものは婦人たちを通しての岩佐老人の悪口だけだった。石川さんが亡くなった時は、岩佐老人もクラブの人々も皆来てくれた。

連盟と僕とのつながりが曲りなりにも出来たのは、クラブと分かれた後しばらく経ってからで、石川さんの所で会った大沢君に、クロハタが出ているようだが、何故僕には送らないのかと言って、送ってくるようになってからだ。連盟の集会の案内も来るようになったが、横浜に居て出席したことはなかった。東京に出てから、神保町のランブルでの月一回の例会に出るようになったのだ。このように綿引君とは関係のないことを書いたのは、無にも等しい僕という存在が、連盟の中の人間として、クラブの人たちとも出会うようになり、そのことを通じて綿引君とも知りあうようになったからである。

大沢君が、カララでの第一回の世界アナキスト連盟に出席するためにイタリヤに立つ時はクラブの人たちは揃って壮行会に来てくれた。岩佐老人の繰上げの米寿の祝をした時には私も出席した。岩佐老人と僕とは会うことも少なかったし、結局単なる「顔を合わせただけ」といった関係でしかなかったが、クラブの人たちとは、メ

1デーの度毎に一緒になるし、そんなことからクラブの集会の案内ももらうようになり、集会にも都合がつけば出るようになった。こうした間に老人も世を去り、連盟も解散し、近藤君も、山鹿君も世を去った。連盟の後で麦社が出来たが、やがて私は麦社を去った。リベルテールを出すようになったのはこの頃であった。アナーキストと人にも呼ばれ、自分でもそう思っているが、アナーキズムについての体系的な把握となると、僕自身何か知ら、まだ不明確なものが残っているのを自分ながら感じていた頃であった。というとは、読者諸君も含めていい年をして、太え面をしやがって、と思うだろう。しかし事実僕は「これから何かしらまとまるのではないか」と感じたのが六十一才の頃、研数学館の前の喫茶店「窓」で、アナーキズム研究会をやっている時だった。その時まで僕は石川さんに「古代史」をやれと言われて以来、夢中で古代史の概念を形成するために、人類学や社会学関係の本ばかり読んで、アナーキズムに関する本は、石川さんに会う前に読んだクロボトキンのもので大杉のもののだけだった。この時すでに大沢君も秋山君も、この道の大家だった。だがそれから十年、僕は僕の青春を賭けたキリスト教と、壮年期以後の古代史の勉強が基盤となって、僕自身の中にアナーキズムは形成されて来た。晩

生種といえど全くの晩生種の人間だ。この十年が僕の形成期というべきものだったのだから、この十年の間にクラブの人たちから学んだものが大きいということは理解できるだろう。

綿引君はクラブの中でも特異な存在だった。一緒に電車に乗って空席が出来、僕が敬意を表して坐らせようとしても、「僕は印刷工で立って仕事をして来たから坐らなくても平気だ」と僕を坐らせてくれた。

現在大新聞には「年中無休と書いた字が印刷されているが、東京の新聞が全部発行できなくなって休んだ日がある。それが俺たちのストライキによってだ」と、当時のストの模様を語ってくれた。

労働組合は大杉たちの指導で結成されたのかと聞けば違う。俺たちは皆で小さなグループをつくって、自分たちの要求をつきつけようとしていたのだ。そして大杉の書いたものを読んで見ると、俺たちの考えて来たことと一致していたのだ。それで俺たちは無政府主義者になったのだ。

労働組合運動の創草期以後、官憲の弾圧が酷薄を極めたことは皆もよく知っている通りである。そして第一次大戦後、ロシアに革命が起り、ソヴィエト政権が樹立されてから、その援助もあり、多くの労働運動の闘士たち

に自由聯合主義を去ってマルクス・レーニン主義陣営に移っていった。大震災後大杉を失ったアナ系の組合には落日の色が濃かった。石川、岩佐、八太と巨星は残っていても、かえってその人々を囲んで分裂を重ね、頽勢に拍車をかけた。そして第二次大戦となり、戦後もこの状況は悪化するばかりだった。僕は麦社で留守当番をやっている時、やって来た一青年が言った。「まだアナーキズムが日本に残っていたとは知らなかった」。

こうした中で連盟が後味の悪い不明朗な解散をし、麦社もつぶれ、クラブは今も続いている。一つの社会集団が出来て、それが続くということは、それを推進させる一つのものがある筈である。連盟が解散したのは、すでにその構成員の中に失望があり、精神の喪失があつて、まだ何か知れ期待や希望をかけていた僕たちが押し切られ、全会一致という形式だけとった多数決となったのだ。

だがクラブは続いている。何故か。今後も続くだろう。何故か。クラブは組織ではない。組織は契約的合意によってつくられているし、契約の解消が解散となる。

岩佐老人の繰上米寿の会に行った時、集った昔の労働者たちの中に、またクラブの会合に出席した時、綿引君たちの中に流れている岩佐老人との深い結びつきを見出

した。この結びつきは人格的なものである。美しい師弟愛にもひとしいものが流れているのだ。

綿引君は語った。「僕たちが組合活動をしているとき、僕たちの会合には、大杉や近藤や石川は来なくても、岩佐さんは必ず来てくれた」と。老人の打ち込んだ熱情をものに受留めたのだ。皆は老人の死を聞くと、未曾有の大雪を踏みわけて千葉南総の山村に駆けつけたという。死に先立って、一人歩きを禁じられている老人が、皆に会いたくて駅まで行った話も聞いた。夢でも見たのか「綿引が困っている。行ってやらねば」と病床からフラフラ立上って表に出ようとしたという話も聞いた。

こうした深い結びつきの上でのクラブだ。老人が改訳した「パンの獲得」が出来上った時、水沼辰君と手をとって泣いて泣いた話も聞いている。大杉のために復讐しようとした和田久たちもいた。こうした人格的な結びつきというものを、その強さというものを知らねばならない。

この三月のことだった。土筆社の主催で伊東三郎と西田信春の追悼会があった。西田信春は共産党のオルグとして九州で活動し、捕えられて行方不明（勿論警察で殺されたのだ）になったが、その組織した農民組合は今も活動を続けている。その当時の仲間が十人位もこの追悼会にかけつけ、その一人は語った。「私も捕えられてい



た時、或、紅白のまんじゅうをもらった。何だろうと思つたら看守が、おまえたは非国民にはやるべきではないが、天皇のお慈悲で御成婚記念に下されると言つた。甘いものには飢えていて、とびつきたい位だったが、考えた。僕たちがこんな目に合っているのは天皇がいるからだ。こんなものを食つてはならない。そして食わなかつた」。唯物論者だつたら、まんじゅうという物質を食つても別に何でもないはずだ。だがこの人は唯物論者になり切れなかつた。西田への愛情、同志との誓、天皇制への憎悪といった精神的なものにささえられている。ここに運動の強さと永続性がある。単なる組織や規約によるのではない。僕が麦社の規約改正といつて除名規定を入れようとしたのに反対して麦社を去つたのは、その時綿引君が、前に言つた言葉を思い出したのだった。綿引君は俺たちの組合の規約には決して除名規定など入れなかつたと言つていた。これがキリスト教徒として僕にしみこんでいる「人を審判してはならない」と結びついたのである。審判そして肅清は権力主義者のすることだ。綿引君は連盟から見たととき、いかにも理窟屋で、角のある人間のような人だ。親しく話して見ると一徹さはあつても善良な人間だつた。女屋君は「綿引はすぐに誰でも信用してしまうので困る」と言つていた。この良さと

一徹さが表裏になっているのだろう。弾圧の激しい中で、労働運動をやりながらも、腕に付いた職業で、労働者は何かと助け合つて生き抜いた。これがインテリの場合だと、生き抜く手段が無く、中浜や古田のように掠屋として生きることの悔恨をもちつつ死に急ぐにいたつた。腕のある労働者、土に生きる農民、これこそ学生運動のはなやかさはなくとも、生き抜いて次の世代に伝えるアナキズムのにない手である。綿引君は、こうしたアナキズムのにない手だつた。

### 尋常の死と非常の死と：

一九七五年十二月三日午前七時半綿引邦農夫さんが死んだ。外では三公社五現業の労働者が史上空前というストを打つて、その終息につき協議していた頃だろう。生活者としてはどうやって国鉄を使わないで、生産現場にたどりつくか、肉体を酷使していた時間だ。綿引さんとは会合の席や日本アナキストクラブで逢つた仲である。鳥打帽を被つた綿引さんは一見マラテスタ1風で、若い人に伝えたかつたのは、大正末期から昭和の初めを生き抜いた労働者とは何であつたかということのように見受けられた。「パン略」をどんな気持で回し読みしたか、クラブはどういう意味で継続してきたか、

岩佐のアナキズムは何であつたか、綿引さんは自己の信条を重ねて素朴な頑固さで自己を固執してきた。そこが今日の若い人々に訴える所があるのだらう。実際、種々の学理的、教説的狭雑物と生活の技術を混こさせたアナキズムなどは肥満した中年者で、善良ではあつても革新からは程遠いように見える。だが時代は変わるのだ。そして労働者も変つて行く。嘗つては気分であつた労働者が今では条理によつて納得によつて動くのである。それだけ合理化されたのであり、従つてその組織が打つストも管理されたストになる。

綿引さんは本質的に不条理であつた。その正義感、権威めかしたもののへの反撥は、周囲への考慮を度外視すること、自分の身体を張るということの有効だと思つていたふしがある。

死もまた不条理である。個人の思惑を越えて訪れる。そこで此岸の死は人観念Vなのだ。人は青年の季節に骨灰は海へ棄てよと夢想する。菅野スガもそうだった。だが彼女の死の前にした明晰さは、世間のしきたりとしてそうも行くまいから妹の眠る正春寺に葬つて欲しいと言ひ残している。そして彼女の墓を移しかえたのは、危惧していたような愛国主義者の手によつてではなく、岡山の一アナキストだつた。(神崎清編「死出の道草」解

説に拠る)

人には尋常の死と非常の死がある。求めて非常の死を構想すればスキャンダライズな死となる。日本に於ける最も底辺的な死生観は吉良上野介の死を不名誉とし、四十七士の死を賞揚することである。だが四十七士の中にも主君の仇を報じると武士の鑑として食禄にありつけるのを願つた人がいて少しも不思議ではなからう。サムライのイデオロギーは山鹿素行に習つた大石には確信犯としてあつたとしても個々の人びとには差異があつたことで「忠臣蔵」は訴えているのだ。

綿引さんの死は尋常の死であつた。岩佐の死が畳の上であつたのを敷く必要がないと同じく、綿引さんの死を敷く必要もない。アナキズムは生の在り方を求めるものであつてどのように死ぬかを求めるものではないのだ。(国家的な規模で死に方を求めるのはファシズムです)とすればアナキストらしい死に方とは野良犬のようにぶち殺されようと、締め殺されようと、巷に窮死するも家族に看取られ昇天するも、それは当人の平常の行いにかかわることだと観念した方がよろしからう。

(文責はしもと)